

氏 名 小池 淳一

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 175 号

学位授与の日付 平成 19 年 9 月 28 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 陰陽道の展開と浸透に関する歴史民俗学的研究

論文審査委員	主 査 教授	常光 徹
	教授	久留島 浩
	教授	篠原 徹
	教授	林 淳（愛知学院大学）
	名誉教授	塚本 学（国立歴史民俗博物館）

論文内容の要旨

本論文は陰陽道の近世以降における展開を民俗研究の視座から検討することを目的とし、二部一二章にわたって論じている。

序論では、主として民俗学の立場から陰陽道がどのように扱われてきたかを具体的に検討し、さらに戦後の陰陽道研究を幅広く取り上げて考察を加えている。その結果として、民俗研究としては、近世以降の陰陽道に起因する知識の具体的な姿を確定し、その位相をとらえた上で庶民生活との関わりを論じていく必要があることを述べている。

第一部では近世に成立した陰陽道書の内容と系譜、さらに民俗的受容の様相を明らかにしていく。第一章「東方朔の成立」では、貞享三年に刊行された『東方朔秘傳置文』を取り上げ、近世に至って板に付されるまで、「東方朔」と名付けられた知識がどのような位相で、どういった史料に現れているかを検討している。結果として古代以来、東方朔に関わると考えられた占いの知識が中国より伝来し、その内容は多様であるものの中世になると具体的な文言として記録され、近世に至って作者や選者は不明であるものの、農事に関わる陰陽道書として成立していったことが明らかとなった。第二章「東方朔の伝承」では、板本『東方朔秘傳置文』に限定することなく、「東方朔」という名称を持つさまざまな民俗の存在を指摘し、書物との関わりを意識しつつ、「東方朔」の民俗としての位相を探っていく。結果として、さまざまな「東方朔」の伝承は文字の持つ記録の蓄積や経験の集積、さらにそれらを批判、検討する庶民の営みと深く結びついていることを明らかにしている。第三章「東方朔の受容」では、前章で概観した「東方朔」の伝承を一定の地域社会で検討することを試みている。具体的には岩手県二戸地方の三上家に伝来した『東方朔秘傳』を取り上げ、その筆録者の生涯や民俗的な環境を探っていく。結果として、板本にない知識でも農事の改良のためには「東方朔」として貪欲に吸収され記録されていたこと、また月待ち行事の記録とともに「東方朔」は、民俗的な経験則の集成としての意味があったことが明らかになった。これは前章での全国的な検討からの知見を個別に実証したという意味を持っているとあってよい。

以上の「東方朔」をめぐる検討を相対化するために、近世に成立し、広範に流布した近世の陰陽道書として「大雑書」を取り上げてさらに議論を進める。第四章「初期大雑書の位置」では、現在知られている最初期の「大雑書」である国立国会図書館蔵の寛永九年板を分析の対象に取り上げ、その成立に至る経緯、内容の検討を行っている。その結果として、初期の「大雑書」は中世の陰陽道書との内容における連続は認められるものの、表記は広い読者層を意識していることを明らかにしている。また中世の陰陽道書の内容を単純に受け継ぐだけではなく、さまざまな日常生活知識も取り込まれていることを指摘している。第五章では沖縄県宮古島南部の集落で個人の守護神祭祀に関わる書物「ソウシ」を取り上げ、その民俗的な実態と「大雑書」との関係を考察している。「大雑書」の地域社会における受容の様相を示している。第六章では青森県津軽地方における「サンゼンソウ」なる書物の印象を探っている。これもまた「大雑書」の受容の姿を示しており、南北に遠く隔たった地域において、それぞれ「大雑書」が生活の中に位置を占めていたこと、それによって書物の民俗ともいべき課題が浮上することとなった。

第一部全体の考察を通して、近世に広範囲に受け入れられた陰陽道書と民俗との関わりを明らかにし、さらに庶民生活のなかで陰陽道の知識が生活経験を法則化し、記録する上で重要な役割を果たしたことを指摘する。また、従来、民俗研究において支配的な思考であった宗教者による特殊な知識の伝播、定着という視点にとらわれず、文字を操り、記録を残す庶民の活動を重視して、陰陽道のような宗教的な思想の展開を考察する必要があることが判明する。第二部ではそうした陰陽道の知識が、今日伝えられている民俗事象の形成とどのように関わっているのかについて検討を進めていく。

第一章「陰陽道系宗教者像」では北奥羽地方の伝承にみられる陰陽道に関わる宗教者である博

士とアリマサという宗教者そのものをめぐる伝承を取り上げて検討を加えている。第二章「陰陽道と説話」は青森県下北半島における民俗芸能の由来譚を取り上げる。これは従来、民俗芸能の伝播者として想定されていた修験の呪力を誇示するものと考えられてきたが、実は『ホキ』における陰陽道由来の説話を換骨奪胎したものであることを明らかにしている。

第三章「陰陽道と民俗芸能」では、前章の成果を意識しつつ、さらに民俗芸能そのものを詞章から分析している。その結果、民俗芸能にこの地域の宗教的社会的展開が溶かし込まれており、現在のかたちとなっていることが明らかとなった。特に山伏神楽として修験道の影響によって形成されたといわれてきた東北の神楽のなかに、陰陽道の要素が見出されることは今後の民俗芸能研究の視座としても重要である。第四章「陰陽道と昔話」は昔話伝承に見出される鬼の呪宝が陰陽道及び周辺の知識によって形成された可能性について論じている。高度の宗教的な発想が、比較的固定していると思われる昔話のような説話の中にも流入していることを確認している。結果として昔話伝承の形成に陰陽道の要素が影響を与え、変容していったことを見通すことができたといつてよい。第五章「暦注の民俗態」は、三隣亡、半夏生、土用といった暦注を取り上げ、それらが民俗文化の中でどういった位置づけが与えられているか、またその原因について考究を試みている。これらは視覚化されにくい時間の意味づけであり、そこには陰陽道の知識の介在を見出すことができる。そして強い禁忌や物忌みの観念が自在に変容しながら民俗として展開していったことが判明する。第六章「陰陽道と民俗信仰の生成」は青森県津軽地方で盛んなイチダイ様信仰の形成過程を、「大雑書」の記述との対応関係を意識しながら解明したものである。書物の知識が民俗的に再解釈され、地域社会における神仏の祭祀や巫俗とも結びつきつつ、個人の守護神仏への信仰として形成されていく様相をとらえている。

全体の結論として、近世以降の庶民生活における陰陽道は、必ずしも宗教者の活動によって広められたわけではなく、板行された陰陽道書や暦書などに記載された知識が長期にわたってさまざまな契機を通じて流入し、民俗の形成に関わってきたことが具体的に解明されたといえよう。また、こうした検討を通して、方法論的にはこうした作業を通じて、宗教者という視点を相対化し、書物の民俗文化における位相を意識するという視座を得て、その有効性を確認することができた点は重要である。

論文の審査結果の要旨

本論文は、民俗研究の視座から陰陽道の近世以降における展開を論じたものである。「東方朔」や「大雑書」など主に近世に成立した陰陽道書に着目し、文字化された知識が庶民生活のなかへ浸透し運用されていく過程で発生した諸問題を、民俗的なレベルから解明しようとしている点に特色がみられる。なかでも、陰陽道の要素がさまざまな契機を通して民俗事象となっていた経緯を、豊富な史料や民俗事例を駆使して多彩な角度から明らかにしている。従来の陰陽道研究とは異なる発想から、庶民生活における陰陽道の受容と展開の諸相を浮き彫りにしており、貴重な成果をあげている。全体の構成は、序論、第1部「近世陰陽道の展開」、第2部「陰陽道の浸透と民俗の形成」、結論、から成る。第1部では、近世に成立した陰陽道書を取り上げ、書誌的な考察を加えたうえで、内容と系譜、さらに民俗的な受容の様相に焦点を当てて論じている。古代以来、中国より伝来した東方朔に関する占いの知識が中世の記録化をへて、近世においては農事にかかわる陰陽道書として成立していった歴史的な道筋を検証し、そこに展開してきた「東方朔」の民俗としての位相を探っている。つぎに、こうした検討を相対化するために、近世以降に広範に流布した「大雑書」を取り上げて、日常における生活知識との影響関係を分析し、「大雑書」が生活の中に占めてきた役割を明らかにしている。第2部では、陰陽道の知識が、今日伝承されている民俗事象とどのように関わっているのかについて考察を進めている。東北地方の民俗芸能のなかに陰陽道の要素が見出されることや、昔話に登場する鬼の呪法モチーフに陰陽道の知識が関与して形成されている点などを具体的な民俗事例に基づいて論証している。また、三隣亡や土用といった暦注をとりあげ、記載された知識と民俗との相互浸透という視点から、それらが民俗文化のなかでどう位置づけられているか、また、その原因について考究している。

以上の構成からなる本論文のすぐれている点は、以下の諸点である。

- (1)近世以降、陰陽道関係の書物が広く流通していく過程で、書物から知識を吸収するという一方向的なあり方ではなく、書物と読者という関係性が文字文化と伝承文化の相互浸透という形態をとりながら生活文化の変容を惹起したことを明確に示した点。こうした視座の獲得から、現在における聞き書きからでは再構成しえない過去における民俗に対する接近の可能性の道を拓いた。
- (2)陰陽道関係の書物である「東方朔」のなかの記事が中世の書物にまで遡ることを踏まえて、それが近世にどのように継承されたのかを緻密に跡づけるとともに、さまざまな古写本に注目し、古写本が作成される意味について解明した点。また、諸写本の地域的な叙述に着目して、その地域的特性に応じたかたちで、前代からの知識が変化する側面を指摘する一方、民俗的知識が陰陽道の形を借りて表現されていく過程を明らかにし、近世社会における経験知と書物による知識との関係を考えるうえで重要な論点を提示している。
- (3)昔話のような口頭伝承に、陰陽道とその周辺知識に注目して歴史的な視点を導入することによって、新たな解釈の可能性を示した。

これまで、研究が手薄であった陰陽道の知識を研究対象として正面に据え、民俗事象との相互の交渉関係に視線を注ぎ、その実態の一面を浮き彫りにした点は独創的で高く評価される。とくに、書物の知識が民俗として受け入れられていく際に生ずる変容や新たな意味づけ、あるいは、民俗知識が陰陽道の形を借りて権威づけられ表現されていく過程を明らかにしていくことで、庶民生活における陰陽道の影響が宗教者の活動によるものだけではないことを確認し得たことも成果である。

一方で、「大雑書」などに記載された知識については農事との関係に主眼が注がれており、都市の人びとがどのように利用してきたのかの記述が希薄である。また、陰陽道書が19世紀に盛んに書き写されたことの歴史的な意味をどう考えるかといった点についても、今後の課題として指摘されるものの、本論文が高い学術的価値を有していることについては審査委員全員が一致した。

以上の結果、申請者の論文は博士(文学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断した。